昭和42年度名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学専攻修士論文概要

対人関係における認知に関する研究

永　田　忠　夫

Ⅰ　問題及び方法

知覚の選択性に関する原理は，他の人を認知する時にも適用されうるのではなかろうか。

知覚の選択性に関して，Newcomb, T. M.* は次の3つの過程をあげている。(1)省略…我々は，つねに感覚器を通じて，無数の刺激にさらされているのであるが，その無数の刺激に対して，その1つ1つについて注意することもできるが，実際は注意していない。2，3の特徴に注意し，その他のものを無視することによって，課題を解決することができるのである。

(2)補足…実際には，そこに存在していなくてもそこにあるはずだと思い，また，そこにあるだろうと推測できるものを補足することによって“その場の情景を完成する”。完成することによってはじめてまとまりのあるものが見える。

(3)構成…構成とは，ある特徴を省略し，他の特徴を補足し2，3の特徴にスポットをあて他の特徴を従属させる過程である。

さて，上述の過程が存在することは，人間が常になんらかの課題状況におかれ，その課題を解決しようという目的的な知覚の過程を使用するからである。その課題解決のために感覚器を使用するのも1つの手段であるが過去の経験，知識，価値体系もその手段となる。

ところで，我々が他者を見る時もこうした選択の過程が存在するはずである。そこで次のような方法で本研究を進めた。美人コンテスト，女子の研究助手審査で最も適した人，最も適してない人を選ぶという課題状況を作り各々の課題状況下で，身体部分に注意が注がれる時間に差があるかどうか，また注意が注がれる身体の部分に違いがあるかどうか，さらに美人にとって重要だと思われる点は美人コンテストの時に，助手にとって重要な点は助手審査の時に，選択的に評価されるかどうかについて検討した。ところで，刺激人物は，6名の女子の全身像を使用した。更にどの部分を見たかを測定するために刺激人物の輪郭がだいたい見える格子状の穴と，顔の半分くらい見える穴をあけたのぞきメガネを試作し使用した。73項目の評価項目を作成し，そのうち印象深かった点及び注意して評価した点のみを，被験者に自由に評価してもらい，それを評価した項目（評価点）として扱ってまとめた。

選択性に関しては，次のように考えてまとめた。我々は人物を見る時，人物の身体部分の位置をだいたい知っているし，教示の際，刺激が全身像であることを述べているので，身体すべての部分が，注意される可能性を持つ。（図地の関係からすれば，すべての身体部分が図になる可能性がある。）そうした状態で，のぞきメガネの中心にあけられた9㎜4方の穴から見る身体部分（ほとんどの時間この穴から刺激を見ていたことは，実験後の被験者の言から確認された。）が，図になって見える。従って，どの部分が図になるかは，被験者の見た部分を測定すればわかる。そこでその穴から見なかった部分は，地になっていたと考える。次にどんな特徴に注意したかは，次のように考えた。評価項目73項目がすべて図になる可能性があるかどうかは，刺激特性，被験者の認知構造によってちがいが生じてくる。従って，美人コンテスト及び助手審査で評価された特徴を，その人の認知可能な（図になりうる）点と考え，それらの特徴が，美人コンテスト，助手審査という異なる課題状況下で，どのように選択され評価されるかを見ていった。すなわち，美人コンテストで評価されたが，助手審査では評価されなかった項目は，助手審査でも認知できたのだけれども，課題状況がちがったので省略されたと考えた。結果をまとめるのにあたって，美人のみに重要な項目，助手のみに重要な項目，共通して重要な項目，共通して重要でない項目の4群さらにそれを，美人コンテストのみで選択された項目，助手審査のみで選択された項目，共通して選択された項目の3群に分け，検討した。

Ⅱ　結果及び考察

刺激として同一人物を見る時でも，役割のちがった人

* Newcomb, T. M. “Social Psychology” 1950

物として見るなら，注意して見るところがちがうかどうか，を見てみた。結果として，美人コンテストの場合はすべての被験者が脚の部分まで全身を見ているが，助手の審査の場合，刺激人物6人中5人に関しては脚を見ない被験者が1人，刺激人物6人中3人に関しては，脚を見ない被験者が2名，刺激人物6人中2人に関しては，脚を見ない被験者が1名，刺激人物6人中1人に関しては，脚を見ない人が2名，と，脚を見ない人が存在する。このことは，美人コンテストの場合は，脚まで必ず見る必要があるが，助手審査の場合には，必ずしも脚まで見なくてもいいという人が16人中6人いるということであり，注意する身体部を選択し観察する人があることを示す。また脚を注意していた時間においても，被験者16人中11人が，より長く，美人コンテストの時注意している。これは，美人コンテストの時には脚までよく見る必要があることを示す。美人コンテストの時には全身を図にして観察することが必要だと推察される。なぜなら，被験者の全員が，審査の際，美人コンテストの時の方が助手審査の時よりも全体的スタイルの良し悪し，脚線美であるかどうかが重要な審査項目であると述べていることからである。従って，被験者が，審査に必要だと思った身体部分を選択的に見ていると考えられる。なお，助手審査の時脚までよく見なくていい理由は，助手にとって，性格的能力的な問題が重要だからである。従って，性格的能力的な判断は，顔中心に見ることによって判断されるので，顔中心の見方をしたのであろう。美人コンテストのみで評価された項目の内容を見ると，美人にとって重要な項目の方が，美人にとって重要でない項目より多い人が16人中11人いた。同様に，助手審査のみで評価された項目は，助手にとって重要な項目の方が，助手にとって重要でない項目より多い被験者は16人中11人ありいずれの審査においても，より重要な項目が評価点になる傾向が見られる。従って，審査に重要だと思っている項目に対して，重要でないと思う項目は省略されやすいと言える。次に，美人のみに重要な項目は，美人コンテストの時の方が，助手審査の時よりも多く評価されているかどうかであるが，美人のみに重要な項目についてみると，美人コンテストのみで評価された項目が，助手審査のみで評価された項目よりも有意に多い被験者は10名ある。また助手のみに重要な項目についてみると，美人コンテストのみで評価された項目より助手審査のみで評価された項目の方が有意に多い被験者は11名あり，いずれの審査においても，審査にとって重要な項目は，対応する審査の時により多く評価された。従って，美人にとって重要な項目は，美人コンテストの時に評価されやすく，助手にとって重要な項目は，助手審査の時評価されやすい。

以上のような結果から，同一人物を見るにしても，相手との関係が違えば，見る視点もちがってくるし，価値的に重要だと思われる点に注意をむけやすいということが言える。従って，同一人物を見て受ける印象，評価点というものは，課題状況（文脈）によって違うし，課題状況に即した，価値的重要さによって選択的に評価する傾向がある。